

出土木材と仏像に使われる木材

京都大学 名誉教授 伊東隆夫



木の文化はわが国の歴史を知る上で欠かせない一つの大きな要素となっています。木の文化を構成する対象を大別しますと、歴史的木造建築、遺跡出土木材、木彫像、木工芸があげられます。いずれの場合も技術の伝承、年代や用材選択の意義などの観点から科学的に未解明な点が多く残されています。木の文化はそれをそのまま享受するにとどまるのみならず、木の文化を科学することにより歴史的な意義が明らかになることが期待され、現に木の文化を科学的に解明することの重要性が近年飛躍的に高まっています。

「出土木材と仏像に使われる木材」については、森林総合研究所木材研究部門木材加工・特性研究領域が長年取り組んでこられた研究課題です。特に出土木材に関しては発掘調査を行なう自治体、あるいは研究機関によって刊行される報告書に個別に掲載されていますので、報告書に接しない限り目にすることはありません。今回の特集により、日頃、日本の歴史や遺跡出土木材に関心を抱いている読者にとっては総合的な知見を得る機会になるといえます。同様に、「仏像の木材」に関しても、造像技法と用材選択の意義などとの関係あるいは用材選択そのものの意義について知ることができます。長年の調査の総まとめというような内容が期待できますので、美術史や木の文化に造詣の深い読者には最新の成果に接することができます。木の文化と科学の重要性が再認識されることになるでしょう。



韓国 陵山里古墳群（忠清南道扶餘郡）百濟王陵

発見された木棺が尾中文彦（木材保存，1939）により日本から運ばれたコウヤマキ製であると同定された歴史的意義のある古墳。